

韓国手話の歴史的変遷とその展開

筑波技術大学 総合デザイン学科

劉 賢国

要旨: 韓国の聾教育はアメリカを手本とした聾教育思想ゆえに、韓国国民の特性に合った、聾者等の権利に添った教育を施行することができずにいる。そこで、韓国手話の歴史的展開と価値、現代韓国の聾教育の教育課程運営の問題点とその改善法案について調べた。

キーワード: 韓国手話、聾者、聾教育

1. はじめに

手話は聴覚障害者がつくり出した言語であり、多くの聴覚障害者が手話の有用性を認識している。視覚障害者らが点字を、身体障害者が車椅子を必要とするように聴覚障害者は手話を必要としている。したがって手話は多くの聴覚障害者の生活と切り離せない存在であり、彼らのそのような姿は自然的な現象であると主張される。L'Épée (1760) は『手話は聴覚障害者らのコミュニケーションのため唯一の言語体系である。そして思想を現わすにあたって手指手段に依存するのは深くて内的な欲求にもとづく自然的な現象だ』と話す。また、手話は人間のかかわりと知識に対する子供の欲求において失望と挫折をより少なくし、また言語的道具を発展させるためのより容易な、より早い道を提供する基となる。したがって聴覚障害者らに対する手話が有益なことは、手話が口話主義の発達によって寄与される利益よりもはるかに大きいと Bonstein (1973) は説明している [1]。

言語学ではかなり以前から手話を一つの言語と認定している。言語としての認定の範疇には、母音が三個しかない言語も一つの言語と認められており、書く文字言語がない多くのインディアンの言語も一つの言語として機能していることは事実だ。我々は、口話主義による先入観から抱く偏見が、無知からくことを認める必要がある。

そこで、本調査研究では手話展開とその問題点に対する韓国内の学界と聾教育界などの最新文献研究などの紹介を行う。

2. 韓国聴覚障害者教育の歴史的変遷

前述したように西欧にあって聴覚障害者教育はスペインを中心に 16~17 世紀にその源を築いて以来、18 世紀後半にきて、フランスとドイツなどが、学校教育を成立するようになり、この時から口話主義と手話主義間の方法論争が提起された。韓国において聴覚障害者教育の成立は、19

世紀末に米国から渡ってきたプロテスタント教宣教師の活動と密接な関係を持つ。伝統的貴族官僚体制下の韓国では、教育は庶民を自制させるのための手段としての普通教育であり、ましてや障害者のための教育に対しては目をかけもしなかった。1882 年に韓国は米国と正式に朝米修好通商条約を結び、それまで中国と日本を通して、間接的に紹介されてきた西洋の文物制度がここから直接流入するようになった。この条約以降、米国は韓国にプロテスタント教宣教師らを派遣。このことによって、他国に比べ、民衆の中に深く米国の文化的伝統が移植されるようになった。

(1) 1881 年にイ・ウォンヘ (李元會)・ホン・ヨンシク (洪英植)・オ・ユンジュン (魚允中) が「紳士遊覧團」において我が国に日本の近代的教育機関を紹介する中で『盲啞院 (1878 年京都に「盲啞院」が設立され開業式を挙行、1879 年 盲啞院は「京都府立盲啞院」と改称)』を紹介し、これが文献上で我が国に特殊教育が紹介された最初の例になった。

(2) 1909 年に米国の長老教宣教師である Rossetta Sherwood Hall 女史が新婚旅行のため中国に滞留中、宣教師らが営む聾啞学校を視察、聾教育に関心を持ち、帰国後、イ・イクミン氏を派遣した。1909 年最初に平壤 (ピョンヤン) 盲啞学校に聾啞部を付設するため、韓国において初の聾啞教育が実施され、手話は自然に、中国式手話が導入された。

(3) 1913 年に再生院 (現ソウル国立聾啞学校) で制度化された学校教育を実施し、日帝下において日本式手話が導入された。1945 年国立盲啞学校改称。

(4) 1947 年に国立盲啞学校初代校長ベ・グォン先生によって、韓国指紋者創案。

(5) 1959 年にソウル聾啞学校とソウル盲啞学校に分離。

(6) 1963 年にソウル聾啞学校：国内最初の [手話] 本発刊した。

(7) 1979 年に金玉財団の後援とソウル聾啞学校教職員を

中心に韓国手話の整備。

(8) 1982年、79年から3年後に、約5,700余単語（手話）が収録された『標準手話辞典』が創刊される。このことによって手話普及に画期的な軸が整った。

(9) 1988年文教部後援で各市度聾啞学校（聴覚障害教師6人、一般教師6人）と韓国聴覚障害者福祉会（聴覚障害者1人、一般人1人）を中心に習いやすく、わかりやすくさせた手話教本『愛の手話教室』を発刊、2002年国立ソウル聾啞学校改称後、現在約7~10種の手話書籍が発行されている。

3. 韓国手話の展開

3.1 日帝治下の特徴

韓国手話の根幹が形成された時期は1920年末であるものと推定することができる。この時期の手話講習内容から、韓国での手話利用が体系を揃えるようになったことが立証される。この講習会を通して見ることができる体系的利用の根拠は、第一に、最初に日常生活言語を中心にするという点、第二に、身边を中心にするものの順次遠いことに履行するという点、第三に、単語で始めて、会話で履行するという点、第四に、教材採択の範囲をできるだけ広げるとのことなどである[2]。このような手話利用は韓国手話の文化的伝統性を確かめる契機になったといえ、初期に造語された固有手話の大部分がこの時期に形成されたと推定される。1920年代は、韓国聾教育の80余年手話利用歴史をふりかえると、口語の影響を最も少なく受けた時期であった。1930年以後から日帝が終結に至る期間までは、日本語を中心とする口語主義が推奨され、日本語普及が目的だったことから、手話に対しては暗黙のうちにも抑圧が重くのしかかっていた。したがってこの時期には自然と、手話利用は萎縮しなければならなかった。

3.2 解放後口語法中心

解放以後にも1880年ミラノ会議の影響と口語法の影響で我が国は口語中心の聾教育を実施した。このような特徴は聾学校教育過程編成過程によく表われている。こういう状況で1963年『手話』が発刊された。この発刊は手話研究や手話への認識への大きな変化のきっかけとなった。しかしこの本の序文で‘手話は聾教育で歴史的な遺物になって口語法がこれに置き換えることを期待する’とすることによって手話に対する非常に低い認識が見受けられた。

3.3 手話の必要性

韓国では、手話用語に対する論争が過熱している。そこで장창욱カン・チャンウク(2000)は、手話を正しい用語に規定する主張する理由は以下のようである。

1) 聴覚障害者のコミュニケーションに最も適していた意思表現方式だ。

2) 聴覚障害者と他者との間の正確なコミュニケーションをはかるための手段だ。

3) 聴覚障害者生活の深層的な面を理解しようとするならば、先に聴覚障害者の母国語である手話を理解しなければならない。

3.4 手話に対する多様な見解

1) 否定的見解

①ミラノククチュエ教育者大会で“手話は聾教育の敵なので聾教育では口話だけが全面的に強調されなければならない。

②手話の姿、形態、感覚体制は口語と似ているが口話を学ぶのに最大の障害要因になる。

2) 肯定的見解

①手話は他の言語と同じように実際言語だ。

②1912年N.Y聾啞学校同窓会長E.Currierが母校に手話教育を廃止、口話教育に転換するという話を聞いて『聾啞人の母国語である手話を抹殺する行為はあたかも鳥の羽根をはさみで切る野蛮的な行為』と抗議することによって手話式教育に復帰。

③国際聾啞協会(WED)第17代会長であるGeorge.Wは『手話は神様が聾啞にくれた最も高貴な贈り物』ということ[3]。

4. 韓国手話研究の動向

イ・キュシクら(1998)は手話の価値を聾教育的側面、心理学的(社会言語学的、発達心理学的)側面、神経生理学的側面で論じている。ここでは聾教育的、言語学的、心理学的、神経生理学の各側面から検討してみる。

4.1 聾教育的側面

これまでさまざまな側面で口話教育が批判を受けてきた。

まず初めに、聾教育的で口話一辺倒教育は、聾啞人の情報受け入れと文化生活の享有欲求を充足させるのに、多くの困難をもたらせた。

二つ目に、教育の経済性追求は口話教育の投入に対する生産性を批判するようになった。

三つ目に、教育での人間学的接近については、聾者を一般的に正常な人に接近させようとする正常化論から逸脱して、聾者の特性と世界を認める立場を強調した。

このような思潮と一緒に1950年代の米国の統合的コミュニケーション法(Total Communication)と旧ソ連の新口話主義(Neo Oralism)の影響を受け、教育方法につい

て、口話教育と共に指文字や手話を使う方法に、再照明し始めた。しかしこの時まででも、手話に対する認識は口話教育を効果的に遂行するための補助手段としての性格が強かった。1960年代から手話の言語学的研究が本格化し、研究の過程で、手話が言語としての立場を確かなものと立証されていった。1980年代から手話を中心に聾教育を実施しようという主張が提起されていった。この頃 2Bi 方法が台頭し始めた。2Bi 方法では、二重言語立場で手話が聴覚障害者の母国語として使われる時、概念学習になりながらも、第2言語である国語学習の妨げにならないという良さを持つ。2Bi 接近法を通して、手話は教育的な意味で聾学生に最も重要な言語で位置を占めるようになった。

4.2 言語学的側面

1960年代、William Stokoe は手話が「語彙項目、文法、命題を無限に生成する機能で、言語が必要とする基準を皆充足させる」という主張を、天才的洞察力で証明するとみられたがそれがまさに Sign Language Structure であった。

当時米国では手話を単純なマイムや身振りに過ぎないことと判断し、絵に近いから象徴とは距離が遠いと見下しして、手話を研究する Stokoe を異端視した（キム・チルカン、1999）。その後米国では手話に関する研究は手話学（Sign Linguistics）としての領域で発展するようになった。手話学は一般言語学分野のある領域に位置している。

1) 音韻論的特徴

Stokoe は音素（phoneme）代わりに手話素（chereme）というのは用語を使いながら、手話素には受形（19）、程度（12）、受身（24）があるとした。その後 Battison によって掌向が追加されて Klima と Bellugi は手話をするのに3要素を主媒介変数と名称し、ここに手の方向、手の接触点、両手関係を副媒介変数と称した。このような手話の音韻論的分析は手話の表記と構成（articulation）の原理を研究するのに助けを与えている [4]。

2) 形態論的特徴

米国手話（ASL）を対象にした形態論的研究は手形、位置、運動の類似性により分類して、その意味との関連を分析した研究、手話語彙に階層的意味があることを指摘した研究から始まった。（KSL の場合 '夫' という手話は結婚 + 男 /# 提示のような階層構造を持つ）語形性に関する研究は新しい造語と借用で形成されるのが普通なのに、ここには複合構成、派生、易姓、複合語などの方法がある。既報 climat と電鈴リュージュの複合語化が上げられる。語形変化に関する研究は動詞の運動軌跡変化が意味を変化させるというのをあげられる。ASL の形態論研究での特徴は classifier（分類、または類似）に関することだ。分類とい

う [お金] でも [電話] と共に受形の自体に意味がある場合で彼ら受形が対象を代理する代名詞のような役割をするだけでなく対象を直接連想させる機能を意味する。手話学で分類の種類では特定の大きさと空間を現わす類似（size and space specifiers : SASS）、取り扱い類似、意味類似、身体類似などがある。手話は思想性が強いと話す理由はこのような分類の利用のためである。

3) 統辭論的特徴

一般的に韓国手話には語順がないことで誤った理解をしているが黄道順（1994）は韓国手話文章が国語と共に S + V + O の語順が守られるが、国語と違った独特の統辭構造があるとした。韓国手話の場合、語彙水準で文法的な表示が形成される場合が多いので、語順では自由度が高いということ予想することができる。自然数語意の場合は単語形態で配列する手話文ではなく、慣用的表現形態として現れるのが特徴である。一方ノンマニュアル信号信号またはノンマニュアル信号動作（non-manual signals）は、文法的な主要機能を遂行する。ノンマニュアル信号信号という音声言語の超分節音所（抑揚、強勢、リズムなど）と似た役割をすることで、表情や頭の動きなどが含まれるだろう。ノンマニュアル信号動作は単独で使われるけれども普通は同時に使われながら、手話の文法的特徴を成し遂げる重要な要素である。

4) 意味論的特徴

意味の構造という単語、語彙、文章などの色々な水準での意味の構成体、手話の意味構造もまた色々な水準で分析できる。このような関係分析は手話語彙の語源の意味と意味論的寄りつくのに多くの助けを与える。意味を持つ言語単位である形態素は、文脈により多様な意味を持つが、彼ら意味の基本単位が意味素で、この基本単位を構成している声援は一定の構成を持った異意味体系を成し遂げる。手話の意味論的特徴では慣用手話をあげられる。慣用手話という固有化現象（idiom 現象）で説明することができるのに内包的意味だったのが外縁の意味を押し出して彼自身が外縁の意味を現わすことで普通語彙より大きい単位すなわち通史的結合によって、慣用手話が使われる。（はい、目 + 安い、盲 + 主だ）文法手話ではこのような固有化現象が発生しなくて自然手話だけで発生することで、韓国手話が人工的に規定された死んだ言語でなく生きている言語であることを現わす。

5) 社会言語学的側面

社会言語学（Sociolinguistics）という言語と社会構造または言語と言語学的、言語と言語に対する態度の内的関係を研究する学問（Valli, Lucas, 2000）である。社会言

語学的側面では社会的言語で手話の位置を主張している。すなわち彼らは聾者によって形成された言語学的共同体 (linguistic Community) を認めて、手話を言語学的に分析している。社会言語学的側面では音声言語と手話は音声以外にも社会的な言語としての独特の位置を持っていると指摘する。そして米国の少数民族がそれぞれ母国語を重視するのは、聾者の社会で彼らの母語である手話を重視するのと脈を同じにすると見ている。

一方 Woodward は手話の社会言語学的で、両親の聴力状態、農家族の数、手話習得時期、手話を習得した教授者、通う学校の形態および児童が好きなコミュニケーションの類型などを指摘している [8]。

4.3 発達心理学的側面

発達心理学的側面で手話使用が聾啞の発達課題を成就するのに助けをあげて、口語の強要は心理的圧迫感と口語に対する負担感でコミュニケーションに否定的な影響を与えられる。

また相対的に不利な文化的環境にある聾啞に、早期に多くの意味ある環境の提供で彼らの潜在的可能性を実現させることができると主張して、彼らに現存する図式 (schema) に適切な言語刺激すなわち手話が必要だと主張した [7]。

また多くの研究者らは、聾啞親の子の聾啞が、正常の両親の子の聾啞より学歴、社会性熟度、社交性、感情表現、級友および成人との適応など大部分の発達領域で優秀であるとして、早期から手話使用の肯定的意味を認めている。

4.4 神経生理学的側面

手話に対する大脳半球の役割に対し 1876 年から 1970 年末まで健聴児童を中心にして、研究した結果を総合してみれば、“綴字法的言語刺激 (単語と文字) は左側大脳半球で処理される反面、手まね言語刺激 (サインと指紋者) は右側大脳半球活動に値する空間的情報の過程を含む。”とした。これは一般的だと伝えられている。

その後 1980 年代初めには聾者と難聴者を対象にして、静的に提示された信号に対する研究結果より大部分が右半球利点を現わす傾向があったとした。Bellugi と彼の同僚らは 1982 年聾者患者の色々な集団を対象に言語と非言語課題のための半球専門化において脳損傷の影響に関し最初に体系的な研究をした。研究対象は 3 人の流ちょうな米国手話を使う左半球が損傷した聾者だった。研究結果、左半球が口語に劣らないように手話の産出に関与するという説得力ある証拠を提供した [5]。

2001 年『サイエンス オール制』最近号で『手話は人間の頭脳の言語で認識する。』とする研究発表があった。

グレゴリー・ヒクコクとエドワード climat 教授は去る 10

年間手話失語症を受けた聾者を観察した結果、手話能力も一般人の音声言語処理能力 (言うことと理解力) を担当する頭脳の左側の部分 (プロカ領域とベルニケ領域) により左右されるということを明らかにしたと主張した。こういう結果は手話が手や身振りで表現するが単純な見解、空間的行動とは別個のことで確実な言語領域という証拠であると強調した。一方、口語の発音機関メカニズムと手話の運動メカニズムすなわち大脳皮質で彼ら領域間に密接な大脳合流 (proximity) があると主張することによって手話は口語の発達を阻害しないと見ている。

本文献調査の結果「韓国手話」は自然性、縮約性、表現上の空間性、意味把握上の視覚性、手動作の多様な変化を要求する類似表現、事物の動作、位置、形態、大きさなどを手の動き、位置、形態に移しておくオノマトゥペ、音声言語のようなりズム、他の人らの役割ができるロールシュブトゥ、聾者の選好性、農民らのコミュニケーション道具としての適切性などの特性がある [6]。反面、国語対応式手話は 1) 形成過程および表現上の非自然性と非縮約性、2) 手話表現上の問題点での①空間活用上の反複合性および閉鎖性②空間表現機能上の制限性および硬直性、3) 意味表現上の反視覚性と不適切性での①言語機能表現上の非文法性②言語機能表現上の反視覚性③意味表現上の不適切性、4) 類似表現の制限性での①類似表現の制限性②オノマトゥペでの非韻律性③手話リズム上の硬直性④ロールシュブトゥでの不適切な役割表現など国語対応式手話に多くの問題点があることが究明されている。

したがって、本調査では手話展開とその問題点に対する韓国内の学界と聾教育界などの最新文献研究の方向性について提言しようと思う。

謝 辞

本調査論文の執筆において石原保志先生に専門用語整理などの多大なアドバイスやご指導を頂き厚くお礼申し上げます。

文 献

- [1] 김승기김·스نگ크 : 韓国手話の心理言語学的研究. 成均館大学校博士学位論文, 1983.
- [2] 김승기김·스نگ크 : ハンゲル式標準手話. 教育部, 1991.
- [3] 김철관김·칠칸 : 手話地図の理論と実際. 仁川城東学校, 1999.
- [4] 석동일석·톤닐 : 韓国手話の言語学的分析. 大邱大学校博士学位論文, 1989.

- [5] 윤병천(ユン・ビョンチョン)：手話の言語的特性と手話通訳. 手話コミュニケーションを思うセミナー (第3回公開研究発表会), 韓国手話研究会, 2001.
- [6] 황도승(ハン・ドスン)：農学生手話の通史構造と発達. 檀国大学校博士学位論文, 1994
- [7] 이규식(イ・キュシク)他：聴覚障害言語地図と治療方法. 大邱大学校出版部, 1998.
米国文献
- [8] Valli and Lucas : Linguistics of American Sign Language. Gallaudet University of Press, 2000.

Historic Change of Korea Sign Language (KSL) and Development

RYU Hyun-Guk

Department of Synthetic Design, Research and Support Center on Higher Education

Abstract: Korean deaf education followed U.S.A.-like deaf education and it cannot enforce education for rights of deaf people. In accord with our characteristic, we examined the development of the history of the current KSL and value, problems of the administration of the course of study of the deaf education and the Improvement Bill.

Keyword: Korean deaf, KSL, Deaf education